



吾平山上陵の巨木（吾平町上名）

昔 大正～昭和初期頃



今



吾平山上陵の前で撮影された記念写真。左奥には参道内に大きな杉が並んでいるのが分かります。これらの巨木は、樹齢300年以上の神木とされ、圧倒的な存在感を放っていました。昭和13年の水害やその後の台風災害等で、その多くが失われましたが、今もなお、わずかに残る巨木が、威厳を放ち歴史の重みを伝えています。



大正9年の写真

昔、鹿屋で起きた出来事にクローズアップ！

カノヤタイムトラベル

地頭・高崎正風の足跡

たかしままかせ

明治時代に宮廷歌人として名を馳せた薩摩藩士・高崎正風。幕末の混乱期に、京都を拠点として国事に奔走したことも知られています。慶応4年（1868年）明治元年（1月）の鳥羽・伏見の戦いでは、征討將軍参謀を務めました。同年4月には鹿児島に戻り、百引・高隈・桜島・牛根・恒吉の地頭に任命されます。任期中、高隈の「谷田の滝」を訪れた際には、見事な景色に目を奪われて歌を詠めなかった話や、中津神社で子ども読書を聞き、武芸を見たというエピソードが残っています。

明治2年（1869年）12月から明治4年（1871年）4月までは、花岡・百引・市成・垂水・牛根・新城・桜島・恒吉（のちに市成・



谷田の滝で、高崎は「心のままに遊び暮らし帰った」と懐古している。

恒吉が外れ、高隈を編入）の最後の地頭に就きます。この間、花岡では鶴羽城跡に鶴羽小学校の前身である「育英堂」を建てたほか、百引では般若寺跡（現・輝北総合支所）に地頭仮屋を建て、点在していた郷土の家を仮屋付近に集める「百引麓移転」を実現させました。



亡くなる半年程前の76歳の高崎が贈った「ら志く」の書。輝北歴史民俗資料館蔵。

その後は新政府に出仕し、要職を歴任。初代御歌所所長として、明治天皇の和歌の指導にも当たりました。明治44年（1911年）の夏、地頭時代を懐かしみ、高崎は百引村長に「ら志く」の書を贈っています。親は親らしく、子は子らしく…。「らしく」は何でも当てはまる永遠の格言だと自著で述べたほどの言葉。今でも百引の地に残る高崎の人生訓です。